命と心の授業「死に備える」講話要旨

医療法人社団爽秋会　岡部医院　佐藤隆裕

平成２９年５月１８日木曜日、聖和学園高校薬師堂キャンパスにおいて、看護系進学コースの２年生１４名を対象に講話を行った。

講話に対する高校からの要望は以下の２点、１「将来看護師になることを目標に、看護系の学校を目指して勉強している生徒を対象に職業理解の一環として実施してほしい。」、２「建学の精神に仏教をかかげる学園であるので、ターミナルケアと宗教との関わりや、医療の現場での宗教による心のケアの取り組みを生徒に学ばせたい。」ということであったが、２点目に挙げられた宗教との関わりについては、講師の力量では生徒への説明は困難と判断し、割愛させていただいた。

今回の講話のテーマは、「(地域での支援を知り）最期までどう生きるかについてを考える」とし、１「これからどんな世の中になるか？」、２「ひとはどのように死に至るか？」、３「地域での支援（多職種の連携)」と３つの単元に分けてお話しした。

１「これからどんな世の中になるか？」

多死／少子高齢化社会の到来について説明した。年々死亡数が増えていることと出生数が減ってきていること、将来推計でも同様の傾向が続いていくと示されている。それに伴い、今後は人口構成比が徐々に変化していき、全人口に占める２０歳から６４歳までのいわゆる労働人口の比率が減少していくとされている。また７５歳以上の高齢者世帯が今後も年々増えていくと予想されているが、特に家族類型別では独居／夫婦世帯が増えていくとされている。これらの情報から、今後の世の中がどうなっていくかを想像してもらった。さらに死亡場所の年次推移について、戦後から 2000 年代にかけて徐々に病院死が増え自宅死が減ってきたこと、ここ最近は介護施設での死亡が増えてきていること、などを説明した。

２「ひとはどのように死に至るか？」

文部科学省の体力運動能力調査のグラフから、加齢に伴い体力が低下していくことが分かる。また、疾患群別予後予測モデルというものがあり、死に至るまでの身体機能の推移については「がん」「臓器不全」「老衰」の３パターンがある。これらから、若年から高齢になり、さらに死に至るまでの体力・身体機能の変化についてイメージを持ってもらった。そして昭和２２年の５大死因と最近の１０大死因とを比較し、徐々に疾病構造が変化してきていることについて紹介し、これらから人はどういう疾患を患い、どのような経過で亡くなっていくのかを概略的に説明した。

そして自宅で死亡した５０歳代の肺がん患者の事例を紹介し、病気を抱えながら最後まで自分らしく生きることについて話題提供した。

３「地域での支援（多職種の連携）」

地域包括ケアというものの考え方について、概要を紹介した。看護師の職業人としての連携と、地域住民としての連携の２面があることを説明した。地域の重要な役割として、民生委員の仕事について、断片的だが紹介した。

講話の最後に、膵癌を患い最後まで自宅で過ごした６０歳代男性の事例を紹介した。膵癌が進行して死に向かう中で、患者本人が「苦しいけど幸せ」という言葉を口にしたことを紹介した。前述の事例と合わせて２事例を紹介したことで、最後までどう生きるかについての考えるきっかけになったかと考えている。

以上の内容で１時間の講話を行った。予定時間を５分延長したため、閉会の前に昼休みのチャイムが鳴ってしまった。しかしそのあとの閉会で、司会の中保さんが歌手 JUJU の歌う「Hello again」という曲を流したところ、何名かの生徒が感極まって泣き出してしまった。高齢者疑似体験や石上先生によるホスピタリティマインドについての講話など、命と心の授業の内容と曲の歌詞やメロディが相まって、生徒の心を打ったようだ。